Q.0　学派別系統図3のアラビアの欄にb)スペインとありますが，何を意味しているのでしょうか.

A.0　現在のスペインのイベリア半島がサラセン帝国の支配下にあったとき，スペインのその地は文化的にアラビア語圏になり，そこで，アヴェンパチェやアヴェロエスらが活動した，ということを意味しています．これは，ユダヤの欄の（スペイン）も同様で，ユダヤの言葉すなわちヘブライ語で活動した人たちがスペインの地に一定数いた，という意味です．もちろん，ラテン語や当時のスペイン語を使うヨーロッパ人もいたはずですが.

Q.1　ロゴスってなんとなく分かるんですけど，よく分からなかったです.

Q.2　〝ロゴス〟の意味をもう少し詳しく教えてほしい.

A.1&2　私もよくわかりません．が，まずは自分で辞書を引き，いくつ意味があって，どういう文脈でどういう意味で用いられるのかを実際に確かめてください（この作業は，人によって異なると思いますが，何十年もかかって，まだわからない，というのが普通です）．一度説明を聞いて，ああ，そうか，わかった，という程度の分かり方では本当に分かったとは言えないでしょう．自分で時間をかけて調べたり考えたりしたことは身についてなかなか忘れません．が，これでは，授業にならないので，一応の説明をしておくと，ギリシア語のロゴスには，大きく二つの意味があって，「ことば」と「理性，合理性」なのですが，どうしてこうなるかというと，この「ことば」は，こころのうちにある合理的な「理性」が考えた内容を表現した「ことば」なので，両者は同じものなのです．従って，この「ことば」は，単なることばではなく，無意味な音声でもなく，感情の発露でもないのです．もっと根源的には「理（ことわり）」というのが適当なような気がします．これが使われる文脈によって，強調されている側面を表すさまざまな訳語を充てられて一つの訳語ではすまないのです．ギリシア語の熟語で，λόγον διδόναι(logon didonai: 直訳は，「ロゴスを与えること」)というのがありますが，logonは，logosの対格で，不定詞di donaiの目的語になっています．普通は，「説明すること」という意味で用いられます．この場合，ロゴス（ロゴン）は，「合理的に考えられて理屈の通った（筋の通った）説明（のことば）」という意味なのでしょう．逆に，否定の接頭辞aがついたalogos（アロゴス）という形容詞は，「ことばがない（ことばをもたない，ことばがつうじない）」という意味と，「理性をもたない，非合理的な」という意味になります．そこで，このギリシア語のlogosがラテン語に訳されるときも，それが使われている文脈に応じて，

強調される意味を表すように訳されます．文字通り，「ことば」であれば，verbum，「理性，合理性」であれば，ratio（ラチオ，英語では，レイショウで，比率という意味）と訳されます．ですから，『ヨハネによる福音書』の冒頭に，「はじめにロゴスがあった」というのは，深い意味が感じ取れるのです．つまり，『創世記』で言われるように，はじめに「～よあれ」という神の「ことば」があったという意味にもとれるし，その「ことば」の背後には，この世界を合理的にどのように作るかという神の中での整然とした「設計図」があり，それが「ことば」になって出てきた，というようにも解釈できるのです．

ギリシア哲学で用いられた「ロゴス」は，ヘラクレイトスの「ロゴス」にせよ，プラトン，アリストテレスらのそれにせよ，それぞれ重要ですが，中世への影響ということを考えると，ストア派の「ロゴス」が非常に重要です．ストア派といっても，創始者のゼノン(335-263 A.C.)から，ローマ時代のラテン語で著作した人たちまで，何世紀にもわたり何人もの哲学者がいるのですが，彼らにほぼ共通した考え方は，人間の生の目的を「自然本性（ピュシス）と同じロゴスによって生きること」とされます．つまり，「自然本性のロゴス」というのがあって，このロゴスは，「自然本性」，この場合は，分かりやすく言えば，宇宙・万有なのですが，この宇宙・万有を「自然本性のロゴス」は形成する原理なのです．この「自然本性のロゴス」をストア派では，神とか必然とか運命という言い方でも表現します．中世のキリスト教の（世界）創造論への影響としては，この宇宙・万有を形成する原理としての「自然本性のロゴス」を，ストア派が，「種子的ロゴス」λόγοι σπερματικοί (logoi spermatikoi: rationes seminales)といって，将来展開されるはずのすべてのもののいわば設計図としての種子を含んでいると見なしたことが重要です．ただし，この「自然本性のロゴス」「種子的ロゴス」は，この宇宙・万有の質料の側にそなわっているロゴスであって，理想的な世界が展開し完成した先にある目的としてのイデアのような，この世界から超越したものではありません．人間は，自分にそなわっているロゴス（理性，ことば）によって，生きなければなりませんが，この自分のロゴスを，できるかぎり，宇宙・万有の「自然本性のロゴス」に一致させて生きることが理想である，ということになります．ストア派は，中世哲学史の研究対象というより，むしろ，西洋古代哲学史，それも特に，アリストテレスよりも後の，古代後期の研究対象なので，各自で西洋古代哲学史の書物を読んで確かめておくことを勧めます．

Q.-2.　「はじめに言葉ありき」の「き」は，単純に過去を表す助動詞として「けり」と同様とこれまで理解していました．（うろ覚えですが．．．）　しかし，先生の仰った「あったらしいです．．．」という原文のニュアンスであれば，「なり」で訳すべきだったのでしょうか？（cf.男もすなる日記といふ．．．）本筋からはずれて申し訳ありません．
A.-2.　忘れていた日本語を思い起こすよい質問です．digredi est exacte me vivere.（脱線こそ我が命．直訳：（本題から）それることこそ私が生きることである）　さて，「き」は経験的過去で「自分が直接見聞きした」ことを「．．．だった」「．．．した」という意味で，「けり」は伝聞的過去で「．．．したそうだ」とか「．．．だったそうだ」というときに使います．「なり」は，このままでは，現在の断定で「．．．である」という意味でしょう．

Q.-１　聖書の「はじめに言葉があった」という言葉がlogosのことであるのを初めて知りました．言葉というのは，みことばのことだと教わって，何となく納得していたので，今日の話が面白かったです．
A.-１　このlogosは，前回言ったように，ギリシア語としては，「ことば」と「理性」の両方の意味を併せ持つので，ラテン語(Vulgata訳)でVerbum(ことば)，日本語で，ことば(みことば)と，英語(欽定訳)で，the Wordと，一方の意味だけを表す語で訳すと，もう一方の意味が見えなくなるところが難しいところです．因に，ゲーテの『ファウスト』（第１部，　1224行以降）では，ファウスト博士は，順に，Wort(ことば)，Sinn(いみ，こころ)，Kraft(ちから)，Tat(わざ，おこない)と訳し直している場面があります．

Q.0　5ページ，196行目からの和訳分の意味を理解できなかった．「ロゴス」の対になるような言葉はあるのか．その言葉の辞書的な意味は何か．（「ことば」と「理性・合理性」のようなもの）
A.0　私も，よく分からなかったので，原典（ラテン語）を自分で訳してみたのですが，分からない原因としては，そこで言われている事柄についての予備知識，前提とされている事柄を読者が知らないから，ということがありますが，翻訳文の場合は，これに加えて，さらに，訳文が間違っている（誤訳）か，不適切であるから，という場合があります．指摘されている文の場合は，神学に関する知識を読者がもっていることを前提にして書かれていることが主な原因でしょう．「ロゴス」の対になるような言葉というと，「コスモス（秩序，本来は，かざり）」に対して，「カオス（混沌，本来は，あくび）」のような関係の語ですか？　理性とか知性に限定して言えば，nous（ヌース）という語があり，これに対しては，感覚aisthesis（アイステーシス）が対になるかと思いますが，「ロゴス」の反対語ならば，（形容詞ですが）alogos（ロゴスのない）というのがありますが，コスモス-カオス，ヌース-アイステーシスのような対になる関係の語は，「ロゴス」の場合は，すぐに思いつきません．cf. πάθος pathos

Q.1　古代の文献や学問的体系が僻地に残っていて，それが中世になって再発見されたそうですが，そうした文化を伝えてきた教会なり学校なり学者なり，そういった人々やテクストは，異端として魔女狩りなどの迫害にあったりしたのでしょうか．あったとして，実際はかなりの文献が失われてしまったのでしょうか．
A.1　いわゆるゲルマン民族の侵入（もっと精確に言う必要があるでしょうが）といわれてきた現象によって，ヨーロッパの中心部では，古代以来のギリシア語・ラテン語による文化的なものが失われたようです（全部なくなったわけではありません）が，中心部以外に

は，この現象は及ばなかったので，中心部での騒ぎが収まってみると，質問者がいうところの僻地では，古代以来のギリシア語・ラテン語による文化的なものが継承されていた，ということです．なお，「異端として魔女狩り」と言われていますが，「異端審問」と「魔女狩り」「魔女裁判」は，別のことで，いわゆる「魔女狩り」は，宗教改革後の16世紀，つまり，近世になってからの現象です．この点を確認するだけでも，これはよい質問だったと言えます．cf. 森島恒雄『魔女狩り』岩波新書(1970)，バシュビッツ／川端・坂井訳『魔女と魔女裁判』法政大学出版局(1970)．

Q.2　講義資料の中で，ラテン語の訳を先生自身がされていましたが，赤井先生は何カ国語を扱えるのでしょうか．また，最も得意な言語は何ですか．

A.2　哲学をやるには，英独仏，ギリシア，ラテンの５つが最低必要です．学部生のうちに，これらのうち，２つはよく読めるように訓練し，ギリシア，ラテンの文法だけはできれば２つとも，少なくとも１つは学んでおくのがよいでしょう．私は，学部を卒業するときには，英独仏，ラテン，古典ギリシア，ロシア（ここまでは大学に入る前），現代ギリシア，サンスクリット，イタリアをこの順で学んでいました．どれも，読みたい文献があって，必要に応じて学んだのです．現代中国語とデンマーク語は途中で挫折しました（特に，当時は，毛沢東とキェルケゴールを読みたいという気持ちと必要を感じなかったから）．卒論は，ラテン語で書きました（私のWebサイトで読むことが出来ます）．大学院の受験は，ドイツ語とギリシア語で受験しました（得意ではないけれども，好きなのはギリシア語です）．大学院に入ってから，アラブ語（アラビア語）とヘブル語（ヘブライ語），それからオランダ語を学びました．これらも文献を読む必要からです．それから，大切なのは，最初のQ- 2にあったように，同じ日本語でも，古文のような古いことばがあるので，英語の場合，OE(Old English)，ME(Middle English)，それにModern English（これが現代英語）と違っていて，或る程度，文法と発音を学ばないと精確に読めません．チョーサーの『カンタベリー物語』は，MEですが，これを読む講読の授業にでていました．それで，ドイツ語も，中高ドイツ語（中世のエックハルトなど），初期新高ドイツ語（近世初頭のパラケルススなど）という現代のドイツ語より古い時代のドイツ語を少々学びました．これらは，それぞれの文法書と辞書が必要です．フランス語も同様で，細かい分類は別にして，古フランス語を少し学びました．そうすると，１７世紀のデカルトやライプニッツなどの現代とは違う綴りのフランス語も或る程度読めるようになります．哲学・西洋哲学史を学ぶのに，現代のドイツ語と英語だけしか読まないでやっている人の気がしれません．ほとんど何もわかっていないのに等しいような気がするのですが．．．．．

Q.3　参考書目の5)の翻訳に駄目だしをされましたが，具体的に何が気に入らないのでしょうか．また，学生でも訳の出来不出来を見分けられる方法はありますか．

A.3　邦訳のp. 386, l. 6「・・・ルネサンス・・・二重である」は，「二重」ではなくて「二様」というべきでしょう．　p. 479, l. 6「スポーネーレ」は，「ス（ッ）ポーネレ」，p. 479, l. 19「デ・リーク」は「ド・レイク」などです．訳文の出来を見分けることはむつかしいと言わなければならないでしょう．まず，日本語を読んで意味が通じるかどうかですか，自分で読んでみて通じる，と思えたら，それまでです．というのは，何かおかしいと思える点があれば，誤訳かもしれない，と疑えるのですが，意味が通じる場合は，その判断は原典と照合しないとわかりません．実際，訳文だけを読むと，その箇所は意味が通じるように思えるのですが，原典と照合すると，原典が言っていることと違う内容になってしまっている（つまり，誤訳）場合があるのです．

Q.0　l. 419 あたりで，中世など存在しない理由が挙げられていますが，それを言い出したら，他の時代も存在しないと言えるのではないでしょうか．それとも，中世だけ特別に複雑なのでしょうか．

A.0　同じ論法で，他の時代も（まとめて「古代」「近世」と言えるほど単純には）存在しないといってよいでしょう．しかし，これまで，「中世」は，「古代」「近世」以上に複雑なのに，ろくに研究もせずに，まとめて「中世」と言ってかたずける連中が多すぎるので，よく調べてみれば，「中世」は「古代」「近世」以上に，一筋縄ではいきませんよ，とド・リベラは言いたかったのだと思います．

Q.1　ショーペンハウアーの毒舌が面白かったです．ショーペンハウアー自身はろくでもない生活を送っていたと聞いたことがあるような気がしますが，本当でしょうか．

　アル=キンディーの著作は一体どこで伝わって来たのか気になります．

A.1　一部を紹介した，「大学の哲学について」の訳者・有田潤さんの評言は，ショーペンハウアー以上にはげしく，かつ適切です．曰く，「フィヒテ，シェリング，ヘーゲルの三大<似非学者>とりわけヘーゲルとその一派に対する論難攻撃罵詈讒謗怨嗟呪詛揶揄嘲弄の爆発であり連続である」（『ショーペンハウアー全集10』白水社，1973，p. 319.）ところで，「ショーペンハウアー自身はろくでもない生活を送っていた」というのは，初耳です．「ろくでもない」の意味次第ですが，私も大学の哲学の教師などやっているので，見る人が見れば，「ろくでもない」奴かもしれません．しかも，自分に才能がないのが分かっているので，職業にはできませんが，作曲や編曲をしたり，チェロを弾いたりすることが，本当は自分が一番やりたいことだとなっては，本当に，「ろくでもない」奴ということになるでしょう．閑話休題，ショーペンハウアーの伝記的研究によると，少なくとも，大学で講義するのをやめて著作活動に専念するようになってからは，規則的で勤勉な生活を送っていたようです．散歩したり，フルートを吹いたり，というのが有名です．詳しくは，白水社の『ショーペンハウアー全集・別巻』に，ヴィグナー（斉藤忍随・兵藤高夫訳）「身近に接したショーペンハウアー一生涯，性格および教説の概要」という彼の生活の有様も伝える記述があります．

　アル=キンディーの著作はバグダッドでは，焚書にされても，周辺の地域に写本が伝わっていれば，現代まで生き延びて私たちが読むことができる，ということがあります．ただし，厖大な数の著作があったと伝えられていますが，多くは失われて，わずかしか伝わっていません．私は，20世紀末にエジプトのカイロで出版されたアラビア語だけの版と，同じく，ドイツで出版されたアラビア語だけの版，それに，同じく，20世紀末にオランダで出版されたアラビア語・フランス語対訳版，21 世紀に入ってからドイツで出版されたアラビア語・ドイツ語対訳版を読んでいます．わずかな著作しか伝わっていないのが残念ですが，少数でも，よく奇跡的に残ったものだとも言えます．

Q.2　“logos” の対になる言葉として “pathos” を提案されていましたが，“logos” “pathos” とくると “êthos” が思い浮かびました．ロゴスは何かに対立する概念ではなく，パトスとエートス，三角関係で共立・共存する概念と思いましたが，いかがでしょうか．

A.2　なるほど，いい感じの連想です．「～オス」「～オス」と語呂合わせのようになってしまいますが，エートスは，「人柄」「品性」という意味をもつので，人間と切り離せません．この点は，パトスも同じです．しかし，ロゴスは，人間にも，「ことば」や「理性」としてそなわっているけれども，そもそも，人間などいなくても，自然や宇宙，世界にある法則のようなものとしてのロゴス（キリスト教成立後は，神のロゴス）がまずある，と

いうのが，例えば，ヘラクレイトスやストア派の考え方ですから，やはり，ロゴスには，直接，対になる概念はない，というのが正しいかもしれません．対立，といっても敵対する，ということではなくて，対になるという意味で，「人間から超越した自然や宇宙のロゴス」対「人間のもつロゴス＋パトス＋エートス」という構造は考えられるかもしれません．

Q.3　原典を読むことの重要さがよくわかった．

　カントを読むのに20年以上かかったということですが，原典で初めて読んだのは何でしょうか．そのきっかけは何ですか．

A.3　『人文学へのいざない』にも書きましたが，哲学の本ということならば，大学に入ってから，アリストテレスの『カテゴリアイ（範疇論）』（ギリシア語）を授業ではなく，自分一人で読み始めたのが，大学１年の終わりか２年の初めだったように思います．丸善に行って，OCT(Oxford Classical Texts)のギリシア語のテクストを探して買ってきて読みはじめました．それは，西洋古代哲学史の本をあれこれいくつも読んでいて，なぜか，プラトンよりも，アリストテレスのほうが気になって，しかも，古代から，学習の順序として，アリストテレスの論理学，自然学，形而上学，倫理学，政治学．．．ということを知って，まず，論理学書の冒頭におかれている『カテゴリアイ（範疇論）』にとりついたのだと思います．大学２年になると，授業でも，他の本を並行して読むようになりました．しかし，高校の教科書や参考書以外で，外国語の原典を覗いてみた（読み通したということではありません）のは，高校生のときに（高１），父の書架に，父と祖父の本があって，フランス語の本が少々と，あとは英語の本があったのですが，英語の本の中で，J. S. Millの *On Liberty* と T. B. Macaulayの *History of England* の何巻かがあって，それを読もうとしたのが最初です．あとで聞いたところでは，ミルは父の本で，マコーレーは祖父の本だったそうですが，これらは，きっかけといっても特になく，家の本棚にあったから開いてみたら，英語の原書だった，ということです．別の本があったら，それを読んでいたことでしょうし，フランス語の本は開いてみても，なんか英語とちがってわからないので，辞書はありましたが，読めなかった，ということです（高２の夏休み以降ならば，少しフランス語をかじっていたので，少しは読めたかもしれません）．

Q.0　神学は論拠を第一原因から取り出すとありましたが，ここでいう第一原因は「神」のことだと思います．だとしたら，どんな論証も結論が「神」がそうしたからになってしまいそうなんですが，どうなんでしょうか．
A.0　その通りです．途中の原因としては，「神」以外が考えられるでしょうが，最終的な原因，第一原因となると，「神」に行き着きます．しかし，現代の私たちが注意しなければならないのは，後の質問でもでてきますが，「結局」とか「要するに」と早急に結論を求めて安心する，というか，丹念に論証を重ねて第一原因までさかのぼろうとする努力を怠る怠慢を，例えば，トマスは戒めている，ということに気付く必要があります．それはちょうど，授業で例に出した，二次方程式の解の公式を自分で導き出せないのに，結果だけ覚えて安心しているようなものです．そう考えると，多くの場合，多くの人は，ある現象の原因を追及して探究し，論証を重ねて行なっても，そう簡単に第一原因にまでたどり着くことは出来ないはずです．ある意味で，それをやって見せているのが，トマスの五つの道（神の存在論証と言われるもの）である，と言えるかもしれません．

Q.1　p.14, l. 520 のトマスの文章についてですが，神学が神の認識に一層類似しているからといって異教徒あるいは無神論者にとっては（哲学より？）完全なものであるとは言えないように思います．
A.1　ここで言われる「神の認識」というのは，「神が神自身を認識する」自己認識のことですが，認識にせよ他のはたらきにせよ，なんらかの活動・はたらきをする際に，はたらきをする自分自身以外に何も必要としない（なぜなら，認識というはたらきの対象も自分自身であるから）ということが，自分以外の何か他のもの（対象）を必要とするはたらきよりも，より優れている，と考える人々（異教徒あるいは無神論者でも）に対して有効な議論なのです．この前提を受け入れない人たち（私たちのうち，非キリスト教徒の現代人の大部分はそうでしょうが）は，相手にされていない，というべきです．

Q.2　神の知が無限の力を持っているとするならば，その力のいくらかを我々に教えてもよさそうなのに教えてくれないのは，神にイジワルな人格がそなわっているからなのか，または他の理由からくるのか．トマスの言う神は人格神か．
A.2　質問者にとっては，意地悪な人格神です．そこで，何故，意地悪（に思えるのか）なのか探究する，という課題が生じます．信仰をもち，神について論じている人たちは，この課題に取り組んでいるといえるでしょう．

Q.3　トマス・アクィナスが述べていた信仰と知識の両立が不可能という論は，一見訳がわからなかったが，神という論証が不可能と言えるようなものの信仰を強めるものだと思いました．
A.3　同一のものについて信仰と知識の両立が不可能ということですね．この一見パラドクシカルな表現の意味は，授業で説明した通りですが，確かに，論証を通して知ることができないことを信じることの意味や重要性を訴えかけている，というのは間違いないと思います．

Q.4　クザーヌスの『知ある無知』を読んでいるのですが，結局，最大のもの（=神）は，理性では，促（ママ，捉）えられないことになっている気がします．デカルトの証明も，脆弁（ママ，詭弁）のようなものを感じます．そして，今回のアウグスティヌス，．．．．．．神の存在証明は，結局，放棄して信じることによってしか，成し得ない

のでしょうか.
A.4　「結局」が２回でてきますが，「結局」とか「要するに」とか言っているようでは，何故，成し得ないように思える存在論証をしつこく多くの人が行なってきたかはわかないでしょう.

Q.5　護教大全（ママ，書名なので『護教大全』）の「信仰をもつ者」という書き方に，違和感があったが，526行目の信仰と知識の意味の違いを聞くと哲学者と神学者の区別に「信仰をもつ者」という言葉を用いていることがなんとなく理解できた.
A.5　その「なんとなく」を明確にことばで表現するとどうなるか，考えてみてください．それを説明しようとすると，レポートの課題として通用するテーマになるかもしれません.

Q.6　「学問的に論証できるものは信仰の対象にならない」というのは何となくですが，ああなるほどと思います．一方で，どうして神学者たちがなぜ，わざわざ信仰の対象を失うかもしれない神の証明に血道を挙げていたのか疑問に思います．当然，あつい信仰心からだとは思うのですが．証明できないことありきで論争していたのでしょうか.
A.6　Q.0やQ.4とも関係がありますが，（デカルトはちょっと断定しかねますが）いわゆる神の存在論証をやっている人（この場合は，例えば，トマスやアウグスティヌスを考えるとよいでしょう）は，実は，自分が神が存在するかどうかを疑っており，それが動機で神が存在するかどうか論証してみた，というのでは決してない，ということです．正確に言うと，彼ら自身は，神の存在を疑っておらず，信じているので，その点では，自分のために論証する必要はないのですが，神の存在を疑っている人に対して（ただし，疑いの内容と程度に差があるので，それに応じて），論証してみせている，というのが正しいのではないかと思います．しかも，「論証」と言いましたが，最後の結論である「故に，神は存在する」という命題が導き出される直前までの論証は，それまでの論証を承認する（納得して受け入れる）側も，それを承認するにやぶさかではない仕方で論述されますが，最後の結論に関しては，いわば，論理的に追い込まれて承認せざるを得ない，別の言い方をすれば，ある種の飛躍をしないと，承認できない，という状況に持ち込むものです．その意味で，これは論証であって論証でないとも言えるので，結論以前と同じ仕方で結論が承認されるものではないので，信仰の対象が（結論以前と同じ仕方で）論証によって論証されて，知られるものとなり，信仰されなくなる，という心配はない，と言えます．それは，ある意味では論証されたと言えますが，論証されていない，つまり知られていない部分がまだある，という言い方もできるでしょう．言葉による論証と説得を学問的訓練として古代・中世を通じて何百年も（長く見積もれば千年以上）やってきたヨーロッパの伝統をもたない，日本人の我々が，彼らの論証を読んでも，なんだか，詭弁のようで納得できない感じがする，というのは，論証の受け取り手のあり方が違う，ということも知っておく必要があると思います.
　閑話休題，哲学史として，彼らの文献を研究するにあたっては，キリスト教徒にとっては，visio Dei（見神）といって，魂だけになってから，直接，神と対面することが究極の憧れとしてあって，その熱意・熱狂は，AKBやアイドルのファンの比ではない，ということ（これは現在でもそうです），第一原因に至るまでの，学問的論証を，省略せずに，テクストに密着してたどる努力を怠っては，彼らがやろうとしていたことはわからない，ということを知る必要があります．そして，実は，第一原因に至るまでの，学問的論証の中に，論理学にせよ，自然に関する研究にせよ，現在の我々の哲学には欠けているかもしれない重要な発想・アイディアがある可能性がきわめて大である，と思われるのです.

Q.0　例えば，化学者が高度な物理学を応用して作られた実験機器の構造と仕組みを完全に理解しないままに実験を行い，その実験結果のデータからあれこれ分析・考察する場合というのは，トマス・アクィナスからすると知識ではなく信仰に属する営みになるのでしょうか．現代科学は高度に専門化していて，一人の人間が新しい科学的知識を「知る」ことは難しくなっていると思います．特に数学が得意でない人にとっては極めて難しいのではないでしょうか．．．（後略）．．．
A.0　よい質問です．一人の人間に限って言えば，質問者のいうことがあてはまります．しかし，トマスが『スンマ』で挙げていた例のように，光学にたずさわる者は，幾何学の研究成果をあらためて自分で証明することなく，成り立つものとして利用して，光学の範囲で学を成立させます．すなわち，トマスのいう「より上位の学」を認めることで，個々の領域を限った学（これを領域学という）は成立すると考え，「より上位の学」の内容を，自分で証明しようとすれば，原理的にはできるけれども，実際にはしないで（信仰するのではなく）信用すると考えます．ところが，聖なる教え（あるいは神学）にとっての「より上位の学」は，この世には存在しないので，自分で証明しようとしても，原理的に（この世では）できないので，信じる（信仰する）しかないわけです．こう考えてくると，「信仰」とか「信じる」ということばの対象が，この世には現実的にはないものを対象としており，それに限って使われていることがわかると思います．我々が，現在，日常的に使っている日本語の「信じる」や「信仰」とずいぶん違うことがわかると思います．ですから，日本語訳だけ読んで，自分の日本語の知識だけで理解しようとすると精確には理解できない，ということがわかると思います．

Q.1　616行からの引用を読んで，「神の啓示の光によって知られる得る限りにおいて取り扱う学」という言い方がはっきりしないなという感じがしたので，「第二項　聖なる教えは学であるか？」の647行からの異論に同意してしまった．680行の「神と至福者たちの知」も，光学や算術という例とくらべると抽象的だと思った．
A.1　「はっきりしない」とか「抽象的」という印象は，Q.0に対して指摘したことが原因ではないでしょうか．

Q.2　聖なる教えが学であるという理由を「上位の学」である神と至福者たちの知だと述べていましたが，まったく理解できませんでした．
A.2　光学と幾何学，それに聖なる教えと「上位の学」との関係構造はわかると思いますが，Q.0に対して指摘したように，この「上位の学」は，そもそも，他の諸学と同じように，この世に存在しないのですから，理解できなくて当然です．理解するものではなく，信じるものなのですから．

Q.3　赤井先生は，「神」のことをよく「神様」とおっしゃっていますが，何か意味があって，あえてこう言っているのでしょうか．以前「プラトン」のアクセントの位置に関してのこだわりを話してらっしゃったので「神様」にも何かあるのか気になりました．
A.3　特に，意図はありません．つい，自分でも気付かないうちに「さま」をつけてしまうようです．

Q.4　トマスが神学大全（ママ，『神学大全』）を著すにあたって重視したのは，伝統的にあった議論なのか，その時代に流行していた議論，あるいはその時代に新たに生じてきた問題でしょうか．
A.4　著作の意図からして，当時の学生たちに，最低限これくらいのことは理解しておけよ，ということなので，当時行われていた議論が取り上げられているはずです．その中には，伝統的なものもあったでしょうし，新たに生じて来たものもある可能性もあります．それを明らかにするためには，トマス以前・以後のスンマと比較検討する必要があります．

Q.5　トマスをはじめとして，中世には神学に関する書が数多（く）存在しているが，体系的・論理的に強い説得力をもった，無神論に関する書物や，有名な無神論者は存在していなかったのでしょうか．あるいは，存在こそしていたが，注目にあたいするほどのものではなかったのでしょうか．
A.5　神学上の論争が生じるのは，無神論ではなくて，ともに神の存在を信じているけれども，教義上の解釈の違い（三位一体の意味やキリストの神性や人性など）をめぐってですが，神のタイプにもいろいろあって，世界創造論を伴うキリスト教の一神教と，それ以外の神（または神々のあり方）をめぐって論争が起こります（実際，正統と異端は，第三者が外部から見れば，どっちもどっちに見えるかもしれませんが，盛んに論争が行なわれ，特に異端を論駁する書が残っています．ここにも，哲

学的な考察のヒントが多くあります）．他方，神の存在を信じない，という意味での無神論者のほうからは，いわば，無神論教を有神論教徒に対して布教しようという意図がなければ，そもそも論争や議論が起こりません．従って，神が存在しないことを積極的に論証する議論も必要ないし，そもそも，放っておいてくれ，ということになります．逆に，有神論のほうからは，無神論に対して，積極的に神の存在を証明する議論をしかける，ということになります．そこで，無神論のタイプとして，古代から存在し続けているのは，エピクロスの原子論に基づく，ルクレティウスの『物の本性について(*De rerum natura*)』に言われているような原子論者があります．このテクストはラテン語ですが，中世においては，かげをひそめていて，近世初頭に原子論の立場をとる人たちによって注目され，さかんに読まれました．

Q.6　よくアリストテレスの名前が文献の中に出て来て，その著作が参考にされていますが，アリストテレスの著作＋考えを否定することは中世西洋では認められていたのでしょうか，あるいはタブーだったのでしょうか．

A.6　時期によって異なります．この点でも，中世は単純に「中世」とまとめてしまうことはできません．トマスの活動した13世紀以前では，アリストテレスの論理学書は別として，『自然学』関係の著作や『形而上学』などは，内容がキリスト教の信仰や聖書に抵触すると考えられて，読むこと自体が禁じられていたこともあります．しかし，トマスの先生にあたる，アルベトゥス・マグヌスやトマスらによって，キリスト教の信仰と整合的にアリストテレスを解釈することによって，逆に，利用されるようになりました．しかし，その後，14世紀の，例えば，オッカム（のウィリアム）などは，全面否定ではなく，個別的な学説に関して，アリストテレスの見解を採用せず，独自の考えを主張するようになります．しかし，批判するにせよ，肯定するにせよ，アリストテレスの影響は，使用する用語や概念，発想や問題設定などのすべてにわたって絶大ですから，アリストテレスを知らなければ，中世の人たちが言っていることは解らない，といっても過言ではないでしょう．もちろん，中世哲学史の中には，プラトン，プロティノス，ギリシア教父（ニュッサのグレゴリスなど），ラテン教父のアウグスティヌスなどの，プラトン的な伝統がありますが，一方，アリストテレス，トマスというアリストテリスムの伝統は影響力は絶大で，専門や好き嫌いにかかわらず，アリストテレスを勉強しておかざるを得ない，ということに，哲学史研究のセンスのいい人はすぐに気付くはずです．私は，学部生のうちに，自分の先生たちから気付かされて，自分でアリストテレスを勉強してきましたが，いい年して，まだ，このことに気付かずに，アリストテレスを読んでいない連中がいるのには，あきれます．もっとも，年をとってから，ギリシア語を読もうと思っても，若いときにトレーニングしておかないと，読めないのでしょうけれども．

なお，中世の大学で，アリストテレスがどう読まれていたかを，知ることができる本として，次の本があります（が，日本語訳が推奨できないのですが）．

C. H. ハスキンズ（青木靖三・三浦常司訳），『大学の起源』，昭和52(1977)年，現代教養文庫，社会思想社．原著は，Haskins, Ch. H., *The Rise of Universities, Originally given as the Colver Lectures in 1923 in Brown University* , 1957, Ithaca, New York: Cornell Univ. Press.

Q.0　『神学大全』の別表に「ペルソナの発出・起源」という項がありますが，ユング心理学と何か関係はありますか．
A.0　ありません．心理学の「人格」（もとはギリシア悲劇の登場人物の役割を表す面の表情）をあらわす「ペルソナ（パースン）」と言葉は同じですが，神学では，三位一体の「父，子，精霊」のそれぞれをペルソナと言い，日本語では「位格」と訳します．が，実は，この「父，子，精霊」は，それぞれ別のものなのに，同じである，ということになっており，これらは異なるのに何故同じと言えるのか，大変な謎です．（別紙参照）

Q.1　ルクレティウスの話のときに，ルクレティウスには哲学者の才能がないとおっしゃっていましたが，どのような点からそう考えたのですか．
A.1　韻文の詩としてはよくできているけれども，哲学的内容としては，エピクロスの考えを述べているだけで，ルクレティウス独自の哲学的主張がない，という意味です．

Q.2　『形而上学』において，自然学・数学・神学について言及されているが，「質料において存在する」ことと，「不動（不変）である」こととは，それほど対立しないのでは？と思った．．．（後略）．．．
A.2　「質料において存在する」ということは，変化し生成消滅にさらされている，ということで，「不動（不変）である」ものは，本来，変化し生成消滅にさらされている質料とは別のもの（この場合，形相）なのです．つまり，真っ向から対立するはずのものどうしです．原子論は，「不動（不変）」つまり変化しないものでありながら，変化し生成消滅するこの世界を説明するために考え出されたという面があります．つまり，原子そのものは不可分で変化せず，それらの組み合わせや配列がかわることによって，変化し生成消滅するこの世界を説明するのです．しかし，それ自体は不可分で変化しない（不動の）原子は，変化し生成消滅にさらされている世界にあって，場所的移動はするので，完全に「不動（不変）」つまり変化しないものとは言えません．つまり，原子論の原子もアリストテレスによれば，「不動ではない」のです．

Q.3　自分で調べろ，と言われるかも知れませんが，オッカムの言うνοῦς ヌース intellectus 知性は近代で言うところの理性とはどう違うものなのでしょうか．聴講していた感じだと理性よりも強力なものであるような印象を受けました．
A.3　intellectus 知性は理性と訳してもよいかもしれませんが，「近代で言うところの理性とは」誰の立場での「理性」でしょうか．カントのように，悟性と区別された理性でしょうか．オッカムの場合は，それ以前の（例えば，13世紀のトマス）人と比べると，ある意味で，信仰によってしかわからないことをきっぱり信仰に明け渡し，何でも，知性的に学問認識できるというわけではない，という態度が感じられますが，同時に，現実に存在するものは，徹底して個別的存在者（個物）である，という立場をとる（つまり，普遍を実在として認めない）ので，オッカム以前の認識論では，「知性は個別的なことがらを対象とせず，普遍にかかわる（個別的なことがらは感覚が捉える）」とされていたので，感覚だけが個別的なことがらを対象とするだけでなく，知性も個別的なことがらを対象とするとせざるを得なかったのではないと思います．

Q.4　キリスト教では，キリストの復活によって人間一般が復活するとされていましたが，具体的には誰が復活すると信じられているのでしょうか．人間全員でしょうか．
A.4　まず，「キリストの復活によって人間一般が復活するとされていましたが」の「いま

したが」というのは，どこで（具体的に誰のなんという著作で）そう言われているのですか？そして，「人間一般」と「人間全員」というのはそれぞれどういう意味ですか？「人間一般が復活するとされて」いたのならば，人間一般が復活するのではないですか？　一般に理解されるところでは，世界の終末に復活の命にあずかるのはキリスト者（正しいキリスト教の信仰のある者）だけである，と思いますが．

Q.0　社会的・政治的背景ではなく，どうしてそこまで三位一体説にこだわったのか知りたいです．
A.0　位格（ペルソナ）としては，父（神），子（キリスト），精霊が，実体としてはともに一つ（三位一体）である，ということ自体が謎であるので，これをなんとか説明することが必要である，ということと同時に，子（キリスト）の「ひと性」を強調する連中や，精霊を重視する連中を理論的に論駁する必要に迫られた，という事情があったのではないかと思われます．が，これは，西洋中世哲学史の研究課題であると同時に，というよりも，むしろ，古代末期から中世始めにかけてのキリスト教史（キリスト教学や神学の歴史）が研究すべき課題として残されている，ということになるでしょう．

Q.1　ウーシアーやヒュポスタシスをラテン語に訳したとき意味がずれているという話がとても面白かったです．日本語でもそういうことは少なからずあるんでしょうね．
Q.1’語学的に間違った使用というのは，言語をまたいである考えというものが伝わる際に避けることのできないことだと思います．
A.1　三位一体の例では，意味がずれているというより，意味を同じにするために，あえて用いる言葉を変えた，ということですが，私たちが翻訳（例えば，日本語訳）だけを読んでいて遭遇する例の多くは，日本語の意味と，原語の意味とでずれている部分がある場合ですね．今回は，Q.3にその好例があります．

Q.2　途中の説明でわからない点が多かったが，ギリシア語とラテン語の間で三位一体の表現の仕方に違いがあるということは理解できた．
A.2　結論だけはわかっていただけたようですね．これはちょうど，「信と知」の関係について言及した際，二次方程式の解の公式を覚えているが，自力で導き出せない状態と同じで，「知っている」とは言えず，「信じている」状態だ，と言ったのと同じですから，できれば，途中の過程を理解してもらえると，「知っている」と言えるのですが．

Q.3　『神学大全』の（第１部）第１問第８項で，「もしも論証的であるとすれば，その論証は権威によるか，それとも理性によるかのいずれかである」（日本語訳 p. 102～103）とありますが，教界（ママ，教会？）において権威であるからといって論証的であるとは思えません．理性のみによって論証すべきではないでしょうか．
A3　よい質問です．ここでは，「論証」という日本語の意味が問題です．質問者が「論証」という日本語で理解する意味と，トマスがdemonstr atioというラテン語で言う意味がずれているのです．ラテン語のdemonstr atioは，例えば，近代語である英語のdemonstr ationのもとになっている言葉ですが，ギリシア語のapodeixisとともに，「何かに基づいて示すこと，提示すること」という意味であって，何に基づくかを限定しないで使われていました．ですから，「論証—demonstr ation（英語）—理性に基づく」という発想は，きわめて近現代的です（現代人としては，これはこれでよいのですが）．しかし，トマスの時代には，demonstratio（ラテン語）は，「理性による」demonstratioもあれば，「理性以外による」demonstr atioもあったのです．そして，「理性による」demonstr atioよりも，「理性以外による」demonstr atioのほうが，説得力がある，という場合もあり得たのです．日本語訳では，それをわかった上で，あえて（あるいは，他にしようがなく）「論証」という訳語をあてたのでしょう．つまり，この例は，13世紀のラテン語の文献を21世紀の言語感覚をもってしては，正確に読めない，という一例になるでしょうか．翻訳のむつかしいところです．

Q.0　キリストの人間性と神性のどちらをどれだけ重視するか，というのが異端とされてしまうほど重要視されるのはどうしてですか？その解しゃくの違いで，例えば聖書を読む上で，信仰を持つうえで，どのような差異がうまれるのでしょうか．
A.0　三位一体は，そもそも合理的に理解しようとしても理解できる内容ではないですから，理解するものではなくて，信じること，とされているわけですが，一番，難しいのは，やはり，「子としてのキリスト」をどうするかだったと思います．しかも，キリストを人として生んだのは，マリアですから，マリア様をどうするか，という問題があります．というのも，ヨーロッパのキリスト教（特にカトリック）は，ほとんどマリア教と言ってもよいほど，マリアがほとんど信仰されているといってもよいほどなので，マリアをどう位置づけるかが問題でした．そこで，当初から，キリストは神でもあるので，ギリシア語で，マリアを「テオトコスtheotokos（theo-神を: tokos生むもの）」という呼び方が行なわれていましたが，このまま，字義通りに解すると，神を生んだマリアも，神と同じレヴェルのものになってしまうので，後に，異端として退けられるアリウス派は，マリアを「クリストトコスChristotokos（キリストを生むもの）」と呼び変え，マリアが生んだのは，キリストの「人間性」のほうであって，キリストには，「神性」と「人間性」のいわば２つの本性（ピュシス），２つのヒュポスタシスがある，と考えたようです．この考え方は，確かに，在る意味では，（キリストのあり方についても，マリアが人間である，という点についても）分かりやすいのですが，しかし，あくまでも，キリストが，「神性」と「人間性」がひとつになって現れた，分ちがたい一つの位格（ヒュポシタシス）であって，その神でもあるキリストを生んだマリアは人間である，という理解不可能で，ただ，信じるしかない解釈を主張するひとたちと衝突しました．理解できないで信じるしかない，という点では，この正統派の解釈のほうが上をいっている，と思います．逆に言うと，人が理性的に分析して理解できるような内容ではないし，そのような分かりやすい内容は信仰の対象ではない，ということにもなるでしょうか．

Q.1　推論の手続きの必然性についてですが，人間の頭の構造から起因する限界はあると思いますが，この宇宙は人間の考える妥当な形式の推論が成り立つと仮定するとうまく証明できるように思われるので，この宇宙に関しては推論の必然性が人間の存在なし既にあるように感じます．地球外生命体の論理学と，この宇宙でない宇宙があれば（物理法則とか論理も異なるとしたら面白い），見てみたいです．
A.1　ボルツァーノは，論理学，数学の分野で，「命題自体」という表現を用いた人ですが，彼の場合は，人間などいなくても，数学や論理学はある，という立場なので，質問者と同じ考えのようです．ですから，私も，この宇宙の中でも地球外生命体の論理学や，この宇宙でない宇宙があれば，ぜひ見てみたいです．もっとも，見てもわからないかもしれないし，もし，わかるとすれば，見てわかっている私たちの思考法則自体がその別の宇宙に会わせて変化してしまっているのかもしれませんね．もし，第三者的な立場から，両方の法則や体系を観察できるならば，両者の対応をつけられるのかどうか考えてみたいです．

Q.2　p. 26の2980以降で，アリストテレスは「推論の必然性」も「結論の端的な必然性」も人間の精神の側に根拠をもつ，と考えたと思われる旨が書かれていますが，トマスは，この必然性の根拠をどこに求めたのでしょうか．仮に，自分がキリスト教信者なら，そこは神に求めたいところですが．
A.2　実は，アリストテレスは，推論や結論の「必然性」のありか（どこにあるか，何に根拠が在るか）について明言していないのですが（ですから，どこにあるのかという疑問が生じるのでもありますが），トマスも，究極的には，この世界が神によってそうなるように創られている，ということになるでしょうが，アリストテレスのテクストへの註解では，そこまで言っておらず，人間の思考のもつ論理法則としてある，としか言えない立場だろうと思います．つまり，アリストテレスも，そして，アリストテレスに従っているトマスも，この問題については，テクストの上では，明言していない，ということです．

Q.3　プロティノスについて以前学んだことがありますが，文章中に「一者」「善」「神」が多く用いられており，それらがすべて同じことだと理解するのに時間がかかりました．ウーシアとヒュポスタシスのことと共に学習すれば，理解しやすかったのかなと今は思います．
A.3　少しは，ギリシア語でプロティノスを読みましたか．本当に理解できたのならばたいしたもの

です．日本語や英語やドイツ語などで書かれたプロティノスについての解説や哲学史の記述を読んだだけでは，学んだとは言えないでしょう（ショーペンハウアーの「哲学史について」を参照）．

Q.4　プロティノスの言っていることがあまり理解できなかった．どうしてそのように考えたのかという部分が省略されているから，あまり納得できなかったんだと思うけれど，このプロティノスの考えた世界観に共感する人がいたのか，不思議に思った．とくに，プシューケーからヌース，ト・ヘンに戻っていく矢印がわからなかった．

A.4　「自分は，どこから来たのだろう？」という強烈な疑問に対する答のひとつが，プロティノスの考え方です．一者から発出して，知性，魂，さらに，物質の世界へといわば，下降してきた果てに，今，肉体をもった私たちはいるのだ，ということに気付いたら（気付いていない人がほとんどで，質問者もそんなこと思ったこともないのでしょう），今度は，本来，自分が落ちて来る前にいた，一番もとの一者へと戻りたい，というのが，質問者が最後に「わからなかった」と言っている箇所にあたります．そもそも，最初の，「自分は，どこから来たのだろう？」という発想がなければ，一者から発出して，下降してきた，という過程が納得できないでしょうし，まして，再び，一者へ戻りたい，という強い思いも，肉体をもって生きている今の状態が最初から続いている本来の姿だ，と思っている人には，起こらないのは当然です．それに対して，肉体をもって生きている今の状態は，本来の姿ではないと考えていたプロティノスは，「肉体をもって生きている」自分を恥じていた，と伝えられています．

Q.5　プロティノスから三位一体説までずいぶん時間的に離れますが，スコラ哲学の人々はそれ程にギリシャ哲学を重要視していたということでしょうか．個人的には，プロティノスを参考にしているなら，同じ場所から流れ出した神の位格も人の位格も対等に扱われるべきではないかなあとも思います．

A.5　ギリシア哲学を重要視していた，というよりも，無視できない程，ギリシア哲学の用語や概念が入り込んでいた，ということだと思います．現在，私たちは，アリストテレスの時代から2000年以上はなれていますが，日本語や欧米の近代語で，「範疇（カテゴリー）」とか「実体」とか「基体」や「属性」などを哲学用語として使っていますが，これら（これら以外にもたくさんある）は，すでにアリストテレスにあるものです．私たちは，ギリシア哲学を重視しようと意識して使っていますか，そんなことは意識せずに，現在の私たちの言葉として使っていると思います．中世の人たちがギリシア哲学由来の用語や考え方を用いていたのも，私たちと同じで，ギリシア哲学を重視しようと思ってのことではないでしょう．閑話休題，この質問者には言っておかなくてならないことがたくさんあります．まず，プロティノス(3世紀)の影響を受けたと思われるアウグスティヌス(4～5世紀)は，教父哲学の代表的存在であって（この時代に，三位一体に関する公会議が盛んに開かれたのです），スコラ哲学に分類される人ではありません．スコラ哲学の中世での最盛期は13世紀です．従って，プロティノスから三位一体に関する公会議が盛んに開かれた時期までは，「ずいぶん時間的に離れます」ということはありません．ニカイアの公会議は，プロティノスの没後，ほんの55年後です．さらにまた，言葉使いを精確にする必要があるのが，「神の位格」「人の位格」というところで，「神の位格」「人の位格」という表現は間違っています．そんなものはありません．位格としてあるのは，「父」「子」「精霊」です．そして，問題なのは，位格としての「子」であるキリストの「神性」と「人性」の問題です．この問題については講義でふれたので，ここでは内容にはふれません．

私の講義の仕方が適切でなくて，諸君に伝えたい内容が正確に伝わっていないとすれば，教員としての私の反省すべき問題を提起してくれたという意味で，質問者には詫びるとともに感謝しますが，同じ私の講義を受けて，私が意図するように理解してくれている受講者もいるので，一概に，私ばかりが反省すべきとも思えません．質問者の理解力，あるいは学習能力が，私の講義を受講することができる水準に達していないのかもしれません．私の授業の内容がこの大学の学生の水準をこえて難しすぎて不適切であるというのでなければ，質問者を合格とした入学試験に問題があったと言わざるをえません．そうではなくて，質問者の理解力，あるいは学習能力が，私の講義を受講することができる水準に達しているというのなら，継続して授業に出席しないで，ときどき来ては，その場限りで，わかったような（本人はわかったと思っているのでしょう）ことを書くな！君のような言葉使いをして，自分勝手な理解をしておきながら（私の意図することを他の人が理解しているのに君が理解していないことに関して，君をかわいそうだと思います），それに気付いていないという輩は，最も，哲学をするのに向いていない．もし不幸にして君の専門が哲学ならば，今からでも専門分野を変更することを考えた方がよい．　げきオコスティックファイナリアリティぷんぷんドリーム

Q.0　ボルツァーノの，人間がいようがいまいが数学の法則は存在するという話が面白かった．どのような根拠を挙げて説明しているのか興味をもった．

A.0　ボルツァーノは，数学・論理学をはじめ多くの分野に沢山の著作があり，それらを読んだわけではないので，私が読んだ範囲でのことですが，質問者を満足させるような根拠を挙げている箇所に行き当たったことはありません．むしろ，最初から，数学者的直観というか，悪く言えば，思い込みのようなものがあるように感じます．しかも，根拠はあげられないが，センスのいい，いい感じの方向への思い込みです．そして，その背景には，カントに対する猛烈な反発があるように思います．というのは，例えば，有名な「命題自体(Satzansich)」というのは，誰かによって言葉で立言（言われる，とか，表現される，とか措定される，と理解して下さい）されているか否か，精神のうちで思考されているか否かにかかわりなく，或るものが存在しているか否かにかかわる立言で，それは，ここからが大切なところですが，外的に客観的存在を前提とする立言された命題とも異なるし，内的に心理作用を前提とする命題とも異なる，とされます．ところが，カントの超越論的（先験的）transzendental哲学では，たとえ言葉の上では「超越論的（先験的）」だとか「客観的」だと言っていても，ボルツァーノからすれば，結局は，これらのどちらかを前提している，ということになり，このカントの立場をボルツァーノは，徹底的に排除しようとして，人間など，いようがいまいが関係なくある「命題自体」を主張したのだと思います．もちろん，これに対しては，では，そんな「命題自体」はどうやって認識されるのか？と反論がくるでしょうが，それに対しては，そんな反論をする者がいようがいまいがあるものはある，としか言えません．カント学者からは，ボルツァーノは，カントの認識論を曲解して，それを批判しているといわれるでしょうが，ここには，プロテスタント・カント哲学に対する，カトリック・オーストリアの哲学という側面もあって，ボルツァーノの影響は，フランツ・ブレンターノの『カントなんかくそくらえ』へ，さらに，ブレンターノの影響は，フッサールへ及んでいます．ただ，誤解しないでほしいのは，カント哲学に対する，学問的にまっとうな批判は，まず，カントの著作を精確に読んだ上で，それに対して批判を加えることだ，ということを知っておいてほしいと思います．実際，フッサールは，ブレンターノの影響で，カントを読まずにいたところ，あるきっかけで，読むようになり，主な著作は全部読んだようですが，特に『純粋理性批判』は熱心に読み，大切なところにアンダーラインを引いていたら，ほとんど全部にアンダーラインを引いてしまったらしいです．日本のフッサール学者は，見習って欲しいものです．

Q.1　近世になって論理学を一から立て直した，とおっしゃっていましたが，そのことにより，中世のそれと大きくかわったのでしょうか．あるいは，同じようなものになってしまったのでしょうか．

A.1　カントが『純粋理性批判』の中で，論理学はアリストテレス以来進歩していない，と言っているのは有名ですが，アリストテレスの論理学に含まれる内容は，ほぼ，近世になっても受け継がれましたが，中世に，とくに13～14世紀に，考え出された「代表・代示(suppositio)」の理論や様相論理に関する内容などは，すっかり忘れ去られてしまった，と言っても過言ではないでしょう．そして，19世紀末から20世紀始めに近現代の論理学が自力で，論理学の水準を上げて来ると，例えば，実は，14世紀には，「代表・代示(suppositio)」の理論が完成されていた，ということがラテン語のテクストが顧みられて，確認され，現在も，中世論理学史の研究が進められているところです．このことは，カトリック圏よりもプロテスタント圏に顕著で，宗教改革でもカトリックのままであった国は，比較的論理学や数学の研究水準が高いまま保たれていた，という感じがします．というのは，ポーランドは，ロシアやプロシア（ドイツ）に挟まれて，政治的には，独立するのに苦労した国ですが，20世紀になってから，人口の少ない割に，多くの優れた論理学者（タルスキやウカシェヴィッチな

ど）を輩出しているのは，中世論理学の伝統のおかげではないか，と思われます．

Q.2　人間の論理学は，この宇宙の状態とその変化からの影響を受けていると考えると，論理学と物理法則には，やはり深いつながりがあるように思います．どちらかをもう一方に還元することはできるのでしょうか．

A.2　一方が他方に還元される，という議論の前に，論理学の位置づけが問題です．論理学は「～学」とは言われるけれども，他のすべての学を記述するための道具（言語，表現手段）であるとすると，物理法則は，その内容と表現（数式やことば）からなり，内容は，表現方法を変えても変わらないと考えられます．この問題は，アリストテレスの論理学書を「オルガノン」（道具）と呼ぶ古代の伝統からはじまり，論理学を他の学問の「道具」とみなすか，論理学自体が内容をもつひとつの学であると見なすか，という16世紀のザバレラとピコロミーニの論争につながり，Q.0で名前を出したフッサールは，論理学自体が内容をもつひとつの学である，とする立場です．これらどちらの立場に立つかで，あらためて，最初の問いにどう答えるか，考えてみる必要があるでしょう．

Q.3　「推論の必然性が，人間の精神にのみ基づいている」とありますが，人間の精神のみならず，「神の精神（？）」のような，何か超越的なものに基づいた推論も，存在してもよいのではないか，あるいは価値を認めても良いのではないか，とも思いました．何となくテキストを読む限りでは，そういった超越的なものを排除した人間一般における普遍的な論理学についてのみ言及しているように見えたので．そもそも，「神」が介在するような論理学や，推論の方法論について，体系的にまとめた人物は存在したのでしょうか．

A.3　キリスト教の創造論に従って，その範囲内で，人間が理解できる論理学を記述することはできるでしょうが，「神の精神（？）」のような，何か超越的なものに基づいた推論は，存在しても，人間の理解を超えているので，記述できない，というのが正直なところではないでしょうか．これを記述するには，それができるために，何か仕掛け，というか，工夫が必要です．ただ，「神」が介在する，ということの解し方次第で，神の創造に由来する，人間に理解可能な論理学，というのは記述可能でしょうから，キリスト教の創造論の範囲内での論理学はすべてそれに該当するのではないでしょうか．

Q.4　Hobbesの発表用レポートがなかなか進みません．赤井先生は，自分の研究が行き詰まったとき何をして気分転換していますか．

A.4　行き詰まるほど研究していないので，なんとも言えませんが，気分転換ならば，まったく違うこと，例えば，チェロを弾くとか，散歩するとか，します．締め切りに負われて論文を書いている時は，そればかりに時間をとられて，完成するまでそれに集中せざるをえませんが，そうでないときは，しかし，普段から，違う傾向の哲学の文献を複数，並行して読んでいます．これは，個人によって傾向が違うでしょうから，一概に言えませんが，精神の健康上，効果があると思います．一種のバランス感覚です．自分の専門として，日中，そして夜も，時間をかけてギリシア語とラテン語の文献を主に読んでいるので，これは今はやっていませんが，大学院の受験のために勉強していたときは，平日は，朝の6時から7時までの１時間を20分づつに分けて，Humeの*Treatise*，Descartesの*Discours de la méthode*，Kantの*Kritik der reinen Vernunft*を原典で20分づつ読む，土曜，日曜は，朝の6時から８時までの２時間を40分づつに分けて同じことをやる，というようにして，英独仏の読解力を均等に保つようにしました．Hobbesを読んでいるのなら，Hobbes自身の英語とラテン語，それにフランス語訳やドイツ語訳，オランダ語訳を同時に参照すれば，同じようなことができるでしょう．それには，１日もはやく，まず，ラテン語，それにフランス語やドイツ語，オランダ語などの文法を機会を見つけて学ぶことです．日本語訳と英語，ドイツ語しか知らなければ，哲学史の知識に裏付けられた哲学はわからないままでしょう．研究が行き詰まる，ということの原因もここにあるのではないでしょうか．「行き詰まっている」暇なんか，ないと思います．学べ！

Q.0　ポール・ロワイヤルの論理学について日本語で説明している本はありませんか．論理学の本というと「現代論理学入門」のような本が多くて見つかりませんでした．4コマ漫画期待してます．

A.0　寡聞にして知りません．日本語で書かれた『論理学史』のような本の中に，簡単な紹介があるだけではないでしょうか．私が知っているのは，山下正男，『論理学史』（岩波全書）1983年，で，この本の，pp. 202〜207に『ポール・ロワイヤル論理学』についての説明があります．また，同じ，山下正男先生の論文で，「西洋論理学史上における『ポール・ロワイヤル論理学』の意味」（『人文学報』京都大学，45号，1978年）というのがあります．どちらも図書館で探してみてください．しかし，アルノーとニコールが書いた現物を読むことも大切です．私は，原典（17世紀のフランス語）で読んでいますが，英語訳があるはず（私は持っていません）ですので，それを探してみればよいのではないですか．4コマ漫画ですが，よく考えると，4コマではおさまらない問題をはらんだテーマなので，4コマはちょっと無理かも．．．．．．

Q.1　個物と個物の間の関係が実在する，という話が面白かったです．くわしい話が気になりました．

Q.2　Francis Abbotの客観的相対主義の話が興味深かったです．

Q.3　客観的相対主義で，「見る人によって個物の関係が変わる」というのは，見る人によって，個物に対する捉え方も，認識が異なるからでしょうか？

A.1〜3　Q.1〜3は，Francis Ellingwood Abbotのobjective relativismに関する感想と質問ですね．Q.3に対しては，個物のとらえ方が変わると関係も変わる，という前提で質問しているとすると，ちょっと（いや，大いに）違う，ということです．Q.3のように考えると，個物のとらえ方に関係は従属する，ということになりますが，むしろ，個物とその関係は同時に，実在性としては，同等にある，いや更に，まず，関係がある，関係によって，むしろ後から個物のとらえ方が明らかになる，という感じがします．この考え方は，ひょっとすると，Abbot の友人だった Ch. S. Peirce の「連続性」の哲学につながっているのではないか，と思います．閑話休題，講義で私が話したことの情報源は，Herbert W. Schneider, *A History of American Philosophy*, New York: Columbia University Press, 1946. という本の，pp. 281〜284にある，Schneiderによる紹介とAbbotの *Scientific Theism*, Boston, 1885から引用されているテクストです．Abbotの著作としては，もうひとつ，遺著となった，*The Syllogistic Philosophy*, 1906があるので，これらを読んである程度考えないと，詳細を述べることはできませんが，Schneider(p. 282)によれば，早くも1864年の論文で，Abbotは，「関係は決して感覚知覚の対象ではありえない．（しかし）我々は実際に諸事物の客観的諸関係を知っている．（だから）諸関係をとらえる純粋で直接的な認識能力があるはずである」と言っているようです．この認識能力をめぐって，Abbotは，カントの現象（現象界）とヌーメナ（叡智界）の区別を批判し（Abbotのカント解釈はロイスによって批判された），ヘーゲルのカント批判に近いように思われるかもしれないけれども，Abbot自身は，ドイツ観念論的前提からは解き放たれているので，ヘーゲルとは異なり，また，スコットランド常識学派とも異なり，コールリッジ主義者の言うreasonやunderstandingとも異なる，the perceptive understanding（知覚の力を備えた理解力，う〜ん，訳せん！）と言っているようです．カント，ロイス，パースの文献にも目を通して，Abbotのテクストに取り組めば，充分，手応えのある（アメリカ近現代哲学史をふまえた）哲学の卒論が書けるテーマですね．だれかやってみませんか（私は遠慮しときます）．

Q.4　論理的必然性の根拠が「純粋客観的イデア的概念」であると，フッサールは主張した，ということでしょうか．（I. 912）　もしそうだとしたら，「俄には判然としない」ものに根拠を求めているという点で，神話的で，信仰と大差ないのではないか，と考えてしまいました．

A.4　そうです．しかし，「俄には判然としない」ので，「俄に」でなくて，時間がかかっても，なんとか「判然と」させようとして，あの大部な書物（『論理学研究』３冊，邦訳は４冊）になってしまったのではないですか．でも，やっぱり，判然としませんけどね．そうなると，信仰がないとやっていけませんから，言ってみれば，「現象学」教という感じですね．しかし，個人的には，誰かがやらなければならないと思って，ああでもない，こうでもない，と格闘している最中のフッサールは嫌いではありませんが．

Q.0　Abbotの個物の捉え方の話で，関係が先にあるということでしたが全く想像がつきません．
A.0　私たちは，関係がその間にある個物のほうを関係よりもよくわかっていると思っていますが，実は，案外，個物は明確ではないということなのでしょう．

Q.1　フランシス・アボット関連の話は何が何だかさっぱり分かりませんでした．来週からは真面目に授業出ます．すいません．．．推論に関する必然性の根拠が人によってかなり違うことに驚きます．「人間の精神」という根拠を少しでも明らかにしようとするのはとても大変な作業だったのでしょう．
A.1　もっと研究されてよいのに，と思う哲学者が，あれこれ思いつきますが，Abbotもその一人です．ここ数年きになっているのは，ロックとほぼ同時代のBur thoggeです．それに，新しいところでは，S. Alexanderとその関連で，Bradley とBosanquetです．

Q.2　前回の講義でいっていた面白い話というのが気になります．時間があれば是非お願いします．
A.2　面白いというより，問題の出来事に対する立場によっては，困った話でもあります．

Q0　いつも言っておられますが，やはり哲学を学ぶうえで外国語の修得は必須なんですね．ドイツ語以外もがんばっていきたいです．
A.1　読解の手段・道具としての外国語の学習は，1)最初に文法を一通り学ぶことと，2)その後，実際にテクストを読む演習・講読の訓練が必要ですが，学部生のうちは，自分の関心に応じて，２カ国語（例えば，英語とドイツ語）は，読めるように2)の訓練までやり，それ以外のギリシア語，ラテン語，フランス語は1)の文法までは学んでおく，というようにするのが，現状に即して実際に実行可能でしょう．そうすれば，大学院に進んで研究を続ける場合は，先の２カ国語以外の読解の訓練も行なうことが出来るでしょう．

Q.1　哲学をする学生が進んでドイツ語以外も学習するようにするためには，その他の言語を必修にすることがやはり手（っ）取り早いのではないでしょうか？
A.1　そうですが，それには，ドイツ語以外の授業も担当できる教員がいなければなりません．「学生は先生の背中を見て育つ」というのは，そういうことで，どの先生もドイツ語しかやってないから，学生も自分もそれでいいんだ，ということになってしまいますが，よその大学へ行けば，必ずしもそうではありません．

Q.2　高校の歴史では，何年に誰々の何が書かれた，というふうに思想史を教わっていたので，今日の，デカルトの方法序説（ママ，『方法序説』）が書かれた時，主流な考え方は別のものだった，という話が，考えてみれば当然ではあるけれど，新鮮なものでした．
A.2　聖トマのヨアンネスの『トマス哲学教程』とデカルトの『方法序説』が，ともに1637年に公刊されたのは，偶然ですが，何か象徴的な出来事ではあります．

Q.3　「AはBではない」という否定命題では，なぜ推論が成立していると言えないのでしょうか．
A.3　この質問は，かなり，条件を補わないと，意味不明です．アリストテレスによる推論の分類と，それを中世論理学がどう受け継いだかを授業で簡単にみましょう．

Q.0　授業に遅れてしまったので板書の意味が良く分かりませんでした．初めから聞いていても分からなかったと思います．この手の話題やものの考え方は苦手です．．．論理学も語学と同じように，哲学をやっていくうちに必ず学ばなければならない分野なのでしょうか？
A.0　その通りです．哲学をやるなら，古典語（最低，ギリシア語とラテン語）と論理学（少なくとも，論理学史と第１階の述語論理の自然演繹まで）をやってください．

Q.1　記号で書いてある状態だと全然わからなかったけれど「英雄は色を好む」の話みたいな例え話だとわかりやすかった．記号のほうも後でおちついて見直せば理解できるような気がした．最後の「腐った食材を正しい手順で料理する」の例え話もわかりやすかった．全然本筋の話ではないけれど，哲学の先生が心理学を担当させられていたという話がおもしろかった．
A.1　最後の点ですが，多くの学問分野が，広い意味での「哲学」から分かれて独立してきています．その意味で歴史が浅いのは，「心理学」「社会学」「美学」などです．日本でいうと，明治時代には，旧制高校（今の大学の教養課程）の哲学の先生はいろいろな科目を担当させられていました．

Q.2　ある命題が真であるかどうか，あるいは真であることを保証するものは何か，ということは論理学では問題にはならないのでしょうか．
A.2　人間の認識全体，あるいは，哲学の問題としては，当然問題になります．そこで，論理学の扱う対象をどこまで引き受けるか，という問題になります．命題が表す具体的な内容を捨象して，その命題が含まれる推論の形式的妥当性を問題にする論理学では，命題の真偽を決定する仕事は，認識論にまかせて，とりあえず，真か偽かなんらかの方法で決められると仮定して，真ならば，こうなり，偽ならば，こうなる，という推論の妥当性のみを扱います．こういう論理学を真と偽の２つの値を扱うので，２値論理といいます．真とか偽というのを真理値といいます．しかし，真とも偽とも決められない第３の値を設定して考察する論理学も考え出され，これは３値論理と言われます．こうなると，真でも偽でもない値にもいろいろ程度の差があるだろうから，３つよりも多い値もありえるとして考え出されたのが多値論理です．いずれにせよ，この狭い意味での論理学は，命題の真理値を決定する方法については，認識論まかせでしたが，今また，認識論や存在論，それに論理学を含めた哲学全体として，この問題をどう扱うかが問題であることは確かです．

Q.3　妥当な推論の形式の覚え唄ですが，日本語（ローマ字）バージョンがあれば覚えやすいのに，と思いました．数学概説の講義で，集合とか写像とかを習ったとき（分野的には基礎論？），先生が哲学の人とは仲が悪いとおっしゃっていたのを思い出しました．論理学と数学基礎論では何か論争などあるのでしょうか．それとも単に先生が気が合わなかっただけなのでしょうか．．．
A.3　個人的な好き嫌いや相性のことはわかりませんが，非常に興味深い指摘です．イリノイ大学教授（数学）だった竹内外史さんが，哲学と数学基礎論について書いたものがあります（『科学基礎論研究』39号，1972，Vol. 10，No. 4所収）．それによると，竹内氏は若い頃から，数学基礎論が好きだったそうですが，数学の他の分野の人たちから，「哲学のようなツマラナイコトをやっている」と思われて困ったそうです．具体的に何か論争がある，ということではなくて，どうも，数学の内部での雰囲気としては，「哲学的」というのは，悪いイメージがあるようです．ですから，基礎論をやっている人も，「哲学的」

と言われたくないので，「哲学」や「哲学をやっている人」を自分とは区別して遠ざける傾向があるのかもしれません．そのことのひとつの現れが，「（基礎論の）先生が哲学の人とは仲が悪い」という表現かもしれません．しかし，この「仲が悪い」というのは，少なくとも「哲学」の側から「数学」を嫌っている感じはしないので，「数学」の側から「哲学」に対する違和感や不信感というものがあるのかもしれないという気がします．例えば，ゲーデルの仕事（特に，完全性定理のほう）は，数学と哲学の間にある（両方にまたがる）ように思いますが，フィールズ賞を受賞した大数学者小平邦彦が，「ゲーデルの定理を勉強したが，自分には難しかった．何とか判ったつもりだが，自信は無い」と言ったことが，岩波文庫のゲーデル『不完全性定理』の「まえがき」(pp. 7～8)に紹介されていますが，数学的抽象性と哲学的抽象性に何か違いがあって，一方になじんでいると，他方を理解するためには，努力が要るということなのかもしれません．

Q.0　今回は特に質問はありません．先生はネクタイにこだわりがあるようですが，ネクタイが正装として定着したのはなぜだろうか？とふと疑問に思いました．「首に何かを巻く」って，冷静に考えるとかなり変態的だなぁと思います．
A.0　たしか，1980年代初めに，イタリア人の先生からイタリア語を習っていたときに，ネクタイはcr avattaというが，もとは，ユーゴ（当時）あたりの農民が首に巻いていた汗ふき用の実用的なタオルを見た（遠征軍の）フランス貴族の発案じゃないか，ということでした．ネクタイにスーツ姿だが，古典語を読めない哲学教師よりも，ネクタイはしていないけれども，古典語を読める（のが当然の）哲学教師のほうがいいと思います．

Q.1　論理学は，哲学を学ぶにあたって重要な学問だと個人的に思うのですが，なぜ広島大学では，講義のコマ数が減っているのでしょうか．教えられる先生が限られているのでしょうか，不思議です．
A.1　今の大学で開講される論理学の授業は，内容やレヴェルから見て，大きく３通りあります．ひとつは，全学部の１～２年生対象の教養科目としての論理学です（ここで，第１階の述語論理の自然演繹まで扱うのが望ましい）．２番目は，工学部や理学部あるいは数学の教員養成系の学部専門課程以上の論理学です（ここでは，専門に応じて，プログラミングなど，理論だけでなく，実用性のある部分を扱います）．最後は，文学部の哲学や科学哲学（これは文学部以外にある大学もあり）などの学部専門課程以上の論理学です（ここでは，教養課程の続きを理論的に学びます）．２番目のものは，論理学と名乗っていなくても，必要に応じて学ばれていますが，１番目と３番目は，なくても，不都合を感じない人が多いので，ここ十数年は（文学部以外では）ないままになっています．１番目の教養科目としての論理学を開講するかどうかは，教養科目の主に哲学・思想系の先生次第です．３番目も，文学部の先生次第なのですが，現在のところ，私以外に，開講の必要性を感じている先生はいないように思います．哲学では，実践哲学だとか応用哲学だとかいって，「～哲学」とはいうものの，実際は，倫理学といったほうがよいようなことを主にやっているからでしょうか．なんでこうなっているのか，教員を選んで，どんな専門の教員にきてもらうかを決めることに私は一切かかわっていない（かかわらせてもらえない）ので，何とも言えません．

Q.2　（前回の内容について）背理法は知っていたのですが，帰謬法というのは初めて聞きました．この２つは基本的に同じ証明法なのでしょうか．
A.2　同じです．ラテン語でdemonstratio ad absurdumといい，直訳すると，「不合理（absur dum）へ導く(ad)論証(demonstr ati o)」で，この直訳に近い訳語が，帰謬法（誤謬へ帰着させる証明方法）です．背理法も内容は同じです．

Q.3　全ての推論の中から妥当な推論が24個残るということでしたが，妥当であると確かめたのはどのような方法によってだったのでしょうか．
A.3　アリストテレスの『分析論前書』を読んでください．

Q.4　背理法のようなAがBではないと仮定し，その推論が間違っていることを示すことでAがBであることを間接的に証明する方法は，個人的にですが，少しずるいというか，何かすっきりしない感じがします．
A.4　「背理法のような～間接的に証明する方法」という言い方は，正確にいうと間違っています．間違っているのは，「推論が間違っていることを示す」という部分で，推論は間

違っていませんし，間違っていては証明になりません．正確に言うと，「AがBでない」と主張する相手に対して，「AがBである」ことを納得させるために，「AがBでない」を前提する妥当な（正しい）推論を行なって，何らかの帰結（結論）を導き出す．ただし，その結論は，相手がとても認めないような不合理な内容の帰結（結論）を導き出すのです．そして，こんな不合理な内容の帰結（結論）がでてきちゃったのは，そもそも，あなたが「AがBでない」と主張するので，それを前提として認めたからだったことを示し，こんな不合理な内容の帰結（結論）が出て来ないようにするには，「AがBでない」と主張するのはやめて，「AがBである」ことを認めればよい，と促すわけです．このように背理法（帰謬法）は，相手の主張を論駁する際に，有効な方法ですが，論証そのものは，背理法（帰謬法）でなくてもできる，ということをアリストテレスは言っています．

Q.5　何回か授業を休んでしまったからというのもありますが，前回の授業から内容が哲学（論理学？）ってかんじになってきたので理解しきれませんでした．今日配られたプリントもよくわからなそうです．

A.5　受講者に理解させることができなければ，教員としての私が責められるのが，最近のご時世ですが，件（くだん）のプリントは，西洋古代・中世の1000年以上にわたる論理学のエッセンスをまとめたものですから，背景となる哲学史の知識がなければ，それだけ読んでもわからないのが当然ですので，心配することはありません．

Q.0　他大学のシラバスなどを見ると，何故うちの学科にはこういう分野の講義がないのか，とか，うちの学科のカリキュラムは某基礎分野を軽視し過ぎなんじゃないか等思うことがあります．お金がないというのは原因としてあるとは思うのですが，多学科と連携したりカリキュラム組み換えたりして解決できそうなこともあるだけに残念だなと思います．
A.0　そうですね，文学部の哲学で言えば，教員は何人かいるのに，フランス語で書かれた文献を読む演習がないのは，学生にとって不幸なことだと思います．以前は，デカルトを読む授業がありましたが，今では，後期にだけ，私の授業で，部分的にフランス語文献を読んでいるだけです．私以外の教員は，ドイツ語の文献か，日本語か英語のものを扱っているようですが，だからといって，特にドイツ語ができるわけでもないだけに，一層残念です．ドイツ語だけやっていると，ドイツ語も誤訳したり，ドイツ語だけにたよって重訳してオリジナルから意味がずれてしまうことは，以前実例で示した通りです．某大学での私の学部時代，３人の教員が分担して，英独仏ギリシアラテンの５カ国語の演習が開講されていました．今いるところでは，教員は同じく３人ですが，私以外の２人は，ドイツ語か英語か日本語を扱っているようで，私が一人で，英独仏伊ギリシアラテンの６カ国語を扱っています．これで，私の給料が安いのは不公平です．

Q.1　なかなか中世哲学は似たような言葉がいろんなロジックでこねくりまわされていて理解が難しいです．ありがとうございました．
A.1　「似たような言葉」ではなく，よくみれば，明確に区別できる「言葉」ですし，「いろんなロジック」ではなく，問題になっている事柄に応じた明確な論理です．それに，「こねくりまわされて」いません．しかるべき，妥当な推論によっています．そして，これが一番大切な点ですが，近現代の哲学と哲学的思考法は，淵源は，古代ギリシア哲学ですが，直接的には，その方法も内容も，中世哲学です．そのことを知らずにか，意図的に無視してかわかりませんが，哲学的思惟として展開された神学的議論を，日本の近現代哲学の研究者は避けるという愚行を犯しているということに，いい加減，気付くべきです．

Q.2　確かに，最後の方は中世というより近・現代の話ばかりになっていました．人間のアタマの造りというか，認識の仕組みに関わる問題は難しいですね．
A.2　こうしてみると，例として取り上げた，推論の必然性の問題は，中世も近現代もない，ということがわかったのではありませんか．むしろ，中世のほうが豊かだということも．

Q.3　私も「内容があまりにも内容」なレポートを書いてしまう気がして，何を書けばいいのか悩みます．シラバスには試験があると書いてありましたが、試験はないのですね．
A.3　はい．筆記試験にかえて，指示したようなレポートを提出してもらうことをもって試験とします．「あまりにも～」の「～」には，通常は形容詞を予想しますが，「内容」という名詞がくると，けっこうインパクトがあります．ニーチェの『人間的な，あまりにも人間的な』のもじりですか．かえって，期待してしまいます．